

マルコ福音書、金持ちの男がイエスに教えを乞うた出来事(マルコ 10:17~22)はよく知られている。このお金持ち、マタイでは青年(マタイ 19:16~22)、ルカでは議員(ルカ 18:18~23)だが、内容はほとんど同じ。だが凝視すると、福音書ごとの微妙な違いに気づく。

自らの生き方に誇りと矜持ある男に(マルコ 10:20)、イエスは「彼を見つめ、慈しんで言われた(10:21)」。これはマルコだけが伝えている印象的なひとこと。今日はこの記述の中へ踏み込んで行こう。

内容は単純だが、人間が生きる現実はまだことに多層的で、私たちの日常にいかにも起こりそう。

男はイエスに走り寄り、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか(10:17)」。

イエスは四六時中群衆に囲まれていたけれども、出立する朝に隙間ができ、よし今だっ、とばかりに近づいて、頭を垂れて道を求めた。男は真面目で謙遜、敬虔な金持ち(10:22)だということが一連の記述から分かる。

男の問いに対し、イエスが律法の根本「十戒」を示すと(10:18~19)、男は「先生、そういうことはみな、子供の時から守って来ました(10:20)」と答えた。

ということは、この程度の真面目では永遠の命に届かないかもしれない(10:17)、という脅えがあったのではないか。だから奇跡を起こすこの凄いラビならば、目の覚めるような厳しい修法を伝授してくれて、今の「人格」以上に成長できるのではないかと期待した。

男は、これまでのような禁欲勤勉ではダメだ、何とか生き方を変えねば、と感じていた。イエスは、男の求めに沿って生き方を変える方法を教えた。

すなわち「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい(10:21)」。

このように新たな世界を開く方法を、具体的に伝えた。

男はどうしたか。「その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである(10:22)」。

実におもしろい。男は「永遠の命を受け継ぐ(10:17)」教えを求め、そのために生き方さえも変える覚悟だったが、イエスの答えに「脱臼」させられた。

そうなのだ。人間は生き方を変えると決意しても、想定外のことに脱臼させられ、易々と総崩れになる。生業道具の網や跡継ぎの責任なら捨てられたかもしれない(1:18,20)。だが莫大な財産を手放すことは難しいらしい。

求道的な男は、軽蔑していた世俗的な「お金」にはね返されてしまった。この俺がこんなにも俗っぽい人格であったとは、と気づかされたこともショックであったろう。しかし、突き落とされた真っ暗闇には、光があった。「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた(10:21)」。この慈しみの光、だ。

男は立ち去ったが、その悲しみゆえに(10:22)戻って来るのではないか。イエスの慈しみのまなざしと声が、男の悲しみをいっそう深め、救いへと導いて。もしも財産が足かせであり続けるならば、聖霊の助けによって財産を失うことになるだろう。男は慈しみの光に捉えられているのだから。

「わたしは苦難の中から呼び求めるあなたを救い、雷鳴に隠れてあなたに答え〜(詩編 81:8)」。

解き放たれるためには、雷鳴が必要なこともある。

ただ、じっと見てほしい。そこには慈しみの光がある。



#### 《おまけのひとこと》

慈しみは 平穩無事な所では響かない 慈しみは 悲しみや痛みと共に響き合う キリストの慈しみは私の悲しみに定着し 私の喜びはキリストの苦しみを思い起こさせる 相互に影となりながら